「ひらく」の反対を「とざす」にしないために

野口竜平

２０２０年春、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、あらゆる領域で「ひらく」ことが難しくなりました。社会全体がどんよりと閉ざされてゆく中、私も計画していた旅を中止し、部屋に篭ることになります。

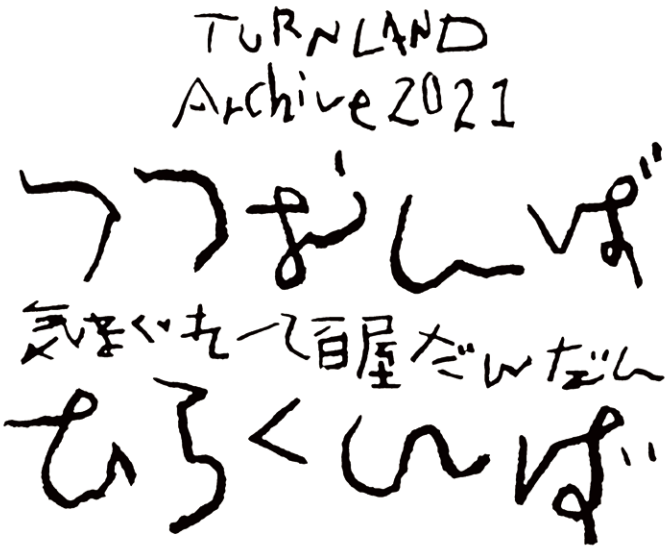
しかし意外にも私のテーマである「未知への道」が閉ざされてしまうような感覚にはなりませんでした。部屋に包まれるようにじっとしていることで、逆に広がる世界を感じていたのです。

私はそれから、「ひらく」の表裏一体にあると感じる「つつむ」と、人の心の関係に着目して過ごすようになりました。

人は、贈り物を包むことで想いを込め、優しく包まれることで安らぎ、包まれたものを前にすることで、その内側に広がる見えない世界を想像できる生き物です。

そしてそれらの感性は、ずっと昔から「つつむ」所作を通じて今に受け継がれています。私はその身振りにこそ、コロナ禍の世界を生きる私たちに必要な哲学があるように感じたのです。

「つつむ」があれば「ひらく」があり、「ひらく」があるからこそ「つつむ」ことができる。そんな「つつむ」の不思議さに、だんだんや周辺地域の皆さんと一緒に遭遇してみたいと思い、〈つつむんば　ひらくんば〉の活動をつくることにしました。



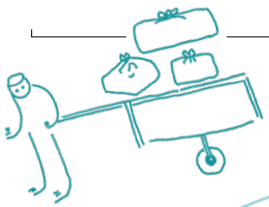
活動概要

〈つつむんば ひらくんば〉は、気まぐれ八百屋だんだん（以下、だんだん）と芸術探検家の野口竜平さんによる協働で行われました。野口さんは「つつむ」の不思議さと遭遇するための「しおり」を制作。その内容に沿ってだんだんでペイントした椅子を包み、自作リヤカー『でるんば号』に載せ、3つの施設（HANPAはすぬま、ステップ夢、池上福祉園）に届けました。椅子を届けるというアイデアは、だんだんの近藤さんが参加している〈みんなのイスプロジェクト〉[*1]からきています。さらに、各施設でワークショップを実施し、それぞれの立場で「つつむ」と「ひらく」を考えてみました。

＊1　まちに椅子を置くことで小さな居場所を作る活動。大田区周辺で、だんだんやHANPAはすぬま、東京工科大学の学生が中心となって行っている。

しおり

- 贈り物を包む
- 『でるんば号』に、包まれた贈り物を載せる
- 「HANPAはすぬま」「ステップ夢」「池上福祉園」に運び届ける
- それぞれの施設で「つつむ」に関連するアクションを起こす
- 「つつむ」にまつわる意見交換をする



1

ここでの
アクション

大切なものを包む

人は、包まれたものと対峙することで見えない世界を想像します

HANPA
はすぬま

最初に伺ったのはだんだんから徒歩5分の「HANPAはすぬま」。代表の吉井大輝さんのおじいさん、おばあさんがお出迎えしてくださりました。包みをひらいて椅子をお届けした後、吉井さんにある〝クイズ〟を出題していただきました。吉井さんにとって大切なものを包んでもらい、ヒントを元に中身を想像します。「これは時間にも空間にも人間にも、漫才にだってあるものです。これを大切にすると、だんだん心地よいものに育っていきます」と吉井さん。その包みの中身は…畳の切れ端でした。でも大切なのは畳そのものではないそうです。吉井さんの大切なものについてお話を聞きました。

HANPAはすぬま 代表
吉井大輝 さん のお話

吉井さんが包んだもの

僕が大切にしていること。それは「間（ま）」です。僕は人の居場所を作りたいとか、心地の良い場所を作りたいと思ってました。ただ、活動していく中で、居場所を作るってどこかおせっかいだと感じたり、他人につくられるものじゃないと思うようになりまして、そこで改めて自分が何を作りたいか考えて言葉にしたのが「間」だったんですね。

みんなのイスプロジェクト

僕は椅子を最小の公共空間だと思っています。〈みんなのイスプロジェクト〉はその実践です。大きな世界の中で小さな椅子なんですけど、座ったり、荷物を置いたり、時間や「間」を作るのが椅子なんじゃないかと考えています。そんな椅子が、世界や社会に増えたらいいですね。

2

包みの中身は小さな畳

1

1 届けた椅子は手で色を塗った一点物。これから、HANPAはすぬまの軒先に置かれて使用されるそうです。　2 後日開催したオンラインイベント＜クイズ！つつむんば＞では、この時の映像を見ながら参加者が包みの中身を想像しました。

HANPA はすぬま　築56年の風呂無し木賃アパートの一室で運営している本の読める貸しスペース。完璧を目指さない「半端」の大切さ、心地よさをテーマにした空間づくりやイベントを行っています。代表の吉井さんは〈みんなのイスプロジェクト〉の一員としても活動中。

2

ここでの
アクション

からだを包む

人は、包まれることで安心します 安心した姿で人と関わってみます

だんだんから東へ5分のところにある「ステップ夢」。ここでは椅子をお届けした後、そこにいた施設の利用者、職員、野口さんら全員が、大きな紙でそれぞれのからだをすっぽり包みました。町を歩いて公園へゆき、皆でぐぐっとくっついてみたり…初めて会う人もいる中で、表情やからだが見えないからこそ、かえって出来る関わりあいを試みました。最後に包みを脱いで、それぞれに感じたことを話し合いました。

3

ステップ夢 施設長
大内伸一さん のお話

見えない殻で包んでいた

実際に紙に包まれてみて、普段の自分が自分自身を守るように「見えない殻」をかぶって生活していたことに気がつきました。今日は、私を包む紙が普段の「見えない殻」の代わりになって、安心させてくれた感じがします。私は、それがないと不安で、自分を包みながら生きているんだと思います。

包みながらひらく

アルコール依存症の方のミーティングには、当事者だけが集まるものがあり、これがとても大事なんです。「お酒を飲んだ時に人を傷つけてしまった」といった失敗談を打ち明けたりするけれど、そこでは誰も裁かず「俺にもそういうことがあったな」とただお互いに共感し合うだけなんです。オープンとクローズドはどちらも必要なんですよね。

ひらくために町にでる

「ステップ夢」は、お年寄りのお宅に出向き、換気扇を掃除したり、開かなくなったタンスに蝋を塗ってきたりする便利屋サービスもやっています。こういう地道な活動を通じて人と出会うことは、病気の理解へのきっかけになるし、実際に病気で苦しんでいる人を勇気づけることもある。ひらかれた場所にするには、訪れてもらうだけではなくて、こちらから町に出ていくのも大切なんです。

1

2

ステップ夢

1 前が見える最低限の穴だけあけて、道ゆく人に驚かれつつも公園へゆきました。 2 おしくらまんじゅうをすると、ひとつの塊の中で自分がどこにいるのか分からず不思議な感覚に。3 みんなで公園の石ころになってみるという試み。散らばって佇んでいると静かな気持ちになってきます。

ステップ夢

西蒲田にあるアルコール依存症や精神疾患がある人を主な対象として作られた社会復帰・社会参加の訓練施設です。社会復帰の一環で、施設の1階でお店をやったり、野菜を配達したり、高齢者の便利屋サービスを行うなど、地域にひらかれた活動も行われています。

3

ここでの
アクション

手のひらで包む

包んでひらいて現れたものを話す代わりに見つめます

池上福祉園

最後に辿り着いたのは、池上福祉園。二人がかりで持ち上げた大きな包みをひらくと、三人がけのベンチが現れました。こうして、でるんば号はすべての施設へ椅子を届け終えました。そののち、利用者の皆さんと粘土を握ってひらくワークショップを実施。言葉では難しくとも、手と粘土を介したコミュニケーションで、気持ちが繋がるような瞬間が訪れました。

2

池上福祉園 施設長
宮﨑裕司さんのお話

コミュニケーションの根っこ

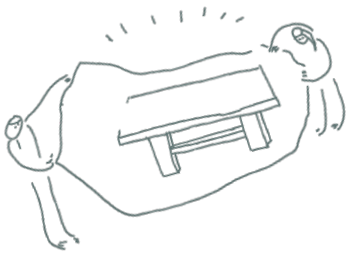
池上福祉園に通う方の中には、手足の麻痺がある方や言葉でコミュニケーションをとるのが難しい方が多くいます。その分粘土には、その人にしか出せない形があるんです。手の中で握る時の力加減もありますし、指や手の皺の跡をよく見ると、実は一つとして同じものはない。握って、ひらく動きの後に、何か言葉ではない形が残る。それを想いとともに誰かに渡したり、受け取ったり…そういったやりとりの中にコミュニケーションの根っこがあるような気がしました。

安心があるから自分をひらいてゆける

言葉でコミュニケーションがとれるひとりの利用者の方が、はじめ、「怖いな」って言ってたんですね。粘土を握るのははじめてだから、自分にできるかな？と。でも、30分ほど経った頃には「ねーねー」って言いながら、野口さんや来ていた方々に、積極的に粘土を「はい」って渡していたんです。はじめは不安でも、だんだんとその空間に包まれて、安心して、一歩前へ出ていく気持ちになったのではないでしょうか。

支える手を繋げてつくるネットワーク

池上福祉園を運営する大田幸陽会は、地域に住む当事者や家族のネットワークからはじまりました。それぞれの支える手が繋がりあい、地域全体で障がいがある方を包みこむことを目指しました。そして包まれてみえる福祉施設も、もともとは、地域にひらかれることから始まっていたのです。原点に立ち返って地域にひらかれた場所にしていきたいですね。



1 粘土を握り、手をひらいて、その粘土でやりとりをしました。 2 手を握ることが難しい人とは、お互いの手を重ねて粘土を包みました。

1

池上福祉園

障がいがある人が、地域の中で自立した生活を営むための支援を行っている施設です。運営母体の大田幸陽会は、当事者の親の会の活動の中から設立されました。大田幸陽会は日中の生活介護のほかに、居住型の共同生活援助なども行っています。

大切な心に気づかされました

気まぐれ八百屋だんだん
近藤博子さんのお話

今回は、だんだんにある椅子をお友達の施設に運び、施設の仲間として受け入れていただき「みんなの椅子」として置いていただくという、今までにない試みをしました。「地域とつながる」「連携をする」と言いながら、なかなか行動に移せないでいたことを、椅子というツールを使うことで実現できました。「あの椅子に誰が座ってくれているかな」「どんな所に置いてもらっているかな」と施設への想いを馳せるきっかけになりました。施設に行くという行為にも繋がりました。そして、今回それを包んで届けるという試みも加わり、「つつむ」ことをこんなに深く考えてみたことがなかったなーと思いますが、実は、知らないうちに「つつむ」という行為は、私たちに染み付いている大切なものなのかもしれないと思います。プレゼントを包む時の相手を想う気持ちは、誰もが経験すると思います。そして、「つつむ」ということは、必ず「ひらく」につながります。「ひらく」時の気持ちも自分が経験しているからこそ、「つつむ」を大事にしているのかもしれないと思います。人にとって、必要な心が「つつむ」と「ひらく」にあるのではないかと思っているのは、私だけかな？

発　　行：気まぐれ八百屋だんだん
デザイン：窪田実莉
編　　集：鈴木健太
執筆・イラスト：野口竜平
編集協力：岩中可南子、村方光沙子（NPO 法人 Art's Embrace）
写　　真：小宮りさ麻吏奈、Ralph Spieler
発　行　日：2022年1月10日

このプロジェクトは、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人Art's Embrace、国立大学法人東京芸術大学が主催するアートプロジェクト「TURN」の一事業「TURN LAND」として実施しています。

TURNは、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトです。

TURN
https://turn-project.com/